

「地域と子ども学」第四号発刊にあたって

白梅学園大学大学院

研究科長 無藤 隆

障害のある子どもたちをどう支援するか。この課題は決して簡単なことではあり
ません。とはいえ、その充実は、量的にも質的にも求められています。

何より、発達障害を中心に、比較的軽いケースを含めれば、小学校などでは、6
パーセントとか、学習障害などを入れると10パーセント近いとか推計されていま
す。自閉症圏に属する子どももアスペルガーなど高機能の自閉症傾向の子どもも含
めるようになったこともあり、1パーセント近い程度いるのではないかと言われる
ようになりました。

20人に一人なり、10人に一人なりいるというのはきわめて大きな数です。特別支
援学校の拡充が必要ですが、同時に小学校の通常学級や幼稚園・保育所などでも対
応が求められることとなります。障害児支援や特別支援教育が正規にも発足し、そ
の推進が全国的に始まっているのです。

いくつかの課題を挙げてみます。一つは、専門的・実践的な知見がかなり得られ

てきていますから、それを普及するための研修や啓発の場を広げることです。現場での研修にもそのようなテーマが増えてきました。大学の公開講座なども盛んです。学生の中に、特別支援学校の教諭免許を取得することも増えてきました。大学院などでの専門的な資格の取得を通して知識や技法を身につけることも出てきています。それらを通して、専門的な知見を備えた保育者・教員・支援者が育っていくことでしょう。

もう一つは、現場での対応を支援することです。幼稚園・保育園・小学校等の現場において、通常学級であっても、障害を抱えた子どもがいるのが当たり前のことになってきました。とはいえ、多くの担任や支援員にとって、その支援は容易なことではありません。他の多くの子どもたちがいる中での支援であるということもあり、そこで求められる援助が多岐にわたることもあり、単なる今までの保育や教育上の指導の工夫では足りないのです。その支援のため、現場を巡る専門家による巡回指導なども広がってきています。

さらに、保護者支援が重要であることは言うまでもありません。その悩みに応じていくこととともに、具体的な関わり方を知りたいと思っている保護者は多くいます。保護者同士の連携も大事な働きをすることでしょう。障害のある子どもへの保護者が孤立せずに、社会の中で多くの子どもの子育てとつながるよう体制を整えることも求められています。